

かかわり合いを大切にし、考えを深め合う子どもの育成

～ ペア学習、グループ学習を取り入れた書く活動の工夫 ～

十日町市立西小学校 教諭 恩田千明

1 取組の視点

・視点1 子どもの考えを広げたり、深めたりできる課題の設定

書くことを通して考える力を高めたい。低学年は、書くことを楽しいと感じたり、書いたことを伝えて褒めてもらったりすることで書きたいという意欲が高まる。そこで、相手意識、目的意識を明確にし、考えを広げたり、深めたりできる課題を設定する。

・視点2 かかわり合い活動の充実

2年生25名の学級である。ペア学習やグループ学習で詩やお話の書き方を習得し、一人一人が活用して書く活動を行う。また、書きたいという意欲が高まったり、自分の考えが深まったりするようなペア学習やグループ学習の在り方をさぐる。

2 授業実践①「詩を書こう ～‘2の1 詩の本’を作ろう～」(10月)の概要

(1) 本単元で育てたい力

- 経験したことから楽しかった場面を思い出し、短い言葉で表現することができる。
- 作品を読み返し、間違いなどを直すことができる。
- 自分や友達の作品の工夫してあるところを見つけることができる。

(2) 具体的な手だてと子どもの変容

①視点1 ‘2の1 詩の本’を作る課題の設定

本単元に入る前に『教室で詩を楽しむ30のアイデア』から子どもたちが楽しく読むことができそうな詩を選び、「おんだ先生おすすめ 詩の本」を作成した。子どもたちは家庭学習や授業導入時に意欲的に読み、詩は楽しい、書いてみたいという意欲をもった。‘2の1 詩の本’を作りお家の人にも読んでもらおうと呼びかけ、相手意識と目的意識をもたせた。

②視点2 ペア学習による詩を書く活動(習得)から一人で詩を書く活動(活用)へ

1次では、教科書の詩をもとに、詩の書き方や工夫について一斉学習をした。

2次では、学習発表会という共通体験を題材とし、学習発表会の写真を入れた学習シートに、ペアで‘ふたりごと’(二人で学習発表会のことを思い出しながらかしたことのメモ)を書き、詩を書くようにした。初めてペアで‘ふたりごと’を書いたり、詩を書いたりしたが、思っていたよりも子どもたちはペアでよく話し合いながら、書くことができた。

【⇒2次後のふり回りアンケートより 子ども25人】

・ペアで書く活動は楽しかったか?	楽しかった	22人	楽しくなかった	3人
・一人で書くより、ペアで書いた方がよく書けたか?	よく書けた	21人	書けなかった	4人

楽しくなかった理由は、自分の思うように書けなかったからである。‘ふたりごと’を書いた後、ペアで書くか、一人ずつ書くかを選択させてもよかった。

3次では、図工の時間に2年生になってのとおきの思い出を描いた絵をもとに、詩を書くようにしたこと、子どもは経験したことを想起しやすかった。‘ふたりごと’や‘ひとりごと’を書き、そこから詩を書くという言語活動は、最初から詩を書くよりも書きやすかったのではないかと考える。また、書くことが苦手な子どももペアで書いたことで、書き方を習得でき、一人で詩を書くことにつながった。

【書くことに苦手意識がある子どもの‘ふたりごと’と詩】

ふたりごと
スイミーをしたんだっけな。
みんなでげきをしたんだよな。
おどりもげきもしたんだな。
どうどうとおどりをしたんだ。
大きな魚の形をちゃんどできたんだっけな。
会場のみんなが手びょうしをしてくれたんだっけ。
げきを大きな声でいったんだな。
心一つにしたんだっけな。
楽しくしたんだっけな。
上手にしたんだっけな。
さいしょからさい後までしたんだっけ。

詩
スイミーを上手にできた
スイミーを
げきでやった
大きな魚を
えがいた
会場のみんなが
手びょうしをしてくれた
心一つにした
楽しくやった
上手に
したんだ
さいしょからさい後まで
やった
おどりをやった
元氣よくやった

⇒ふたりごと

⇒詩

【書くことが中程度の子ども‘ひとりごと’と詩】

ひる休みブランコにのった
ブランコにのったんだっけ。
高くこげたんだけ。
少しこわかったんだよな。
とんぼがとんでいたなあ。
ちようちよもとんでいた。
はちもとんでいたなあ。
みゆちゃんか
「いっしょに手をつなごう。」
と言ってくれたんだっけ。
少しこわかったけど、少しなれてきたんだっけ。
少し高くまたなつた。

☞ひとりごと

ひる休みブランコにのった
のつてあそんだ
高くこぎすぎて
少しこわかった
とんぼがとんでいた
ちようちよもとんでいた
はちもとんでいた
みゆちゃんが
「いっしょに手をつなごう。」
と言ってくれた
うれしかった
少しこわかったけど
少しなれてきた
少しまた 高くなつた
またこわくなつた
上をむくと空を
とんでいるみたいだった

☞詩



3 授業実践②「お話を作ろう ～‘つづき落語ばなし’を作りお話をひらこう～」の概要

(1) 本単元で育てたい力

- 想像をふくらませながら、読み手に分かるように、組み立てや表現を工夫して続き話を書くことができる。
- 書いた続き話を読み返したり、読み合ってアドバイスし合ったりして、推敲することができる。

(2) 具体的な手だてと子どもの変容

①視点1 想像したことをもとに、「つづき落語ばなし」を作る課題の設定

落語の続き話を想像して書く活動は、自由に空想や想像の世界を膨らませることができるこの時期の子どもの特性を生かすことができ、楽しい活動となった。また、論理的な落語続き話を作るために、「その後どうなるの?」と思う文になっているか(話の順番)、「けち」な性格をもとに行動を考えているか、なるほど!おもしろい!というおちになっているかを意識させるようにした。作った続き話を学習参観日に「お話会」として友達や保護者に聞いてもらう活動を設定し、相手意識、目的意識をもたせた。

②視点2 グループ学習(3人)による推敲(読み合う→アドバイスをし合う→続き話を推敲する)

本単元に入る前から学級文庫に落語絵本を置いたり、おちを考えさせながら読み聞かせをしたりしたことは、自分も書きたい!という意欲付けとなった。また、2年生では続き話を書く活動は初めてだったので、教科書の例文「夕方、わたしはわすれものをとりに教室にもどりました。教室の戸をあけると、…」の続き話を書かせたことで、落語の続き話も書けそうだという自信につながった。そして「お話カード」(6枚)を、順序を考えて貼った「お話メモ」はどの子も時間内に書くことができた。

「お話メモ」をコピーして配布しておき、3人グループで読み合い、まずは「おもしろいな、よく書けているな」と思うところに線を引き、理由を書くようにした。さらに「もっとこうするといいいのでは」というアドバイスを書くようにした。子どもは友達の続き話をじっくりと読み、感想やアドバイスを書いたが、その後の推敲までを1時間の授業でねらってしまったために、話し合っただけで伝え合う時間が確保できなかった。しかし、友達からどんなアドバイスを書いてもらえたのだろうと、興味深く読む姿が見られた。また、アドバイスを参考にしながら、自分の続き話を推敲することで、さらに読み手をひきつけるような続き話を書くことができた。

【☞ふり返りアンケートより 子ども25人】

- ・「つづき落語ばなし」書く活動は楽しかったか? 楽しかった24人 楽しくなかった1人
- ・2人の友達から読んでもらい、アドバイスを書いてもらったことで、パワーアップしたか?
(パワーアップ→けちな性格を考えて書く・なるほど!おもしろい!おち・続きが読みたくなるように書く)
はい 22人 いいえ 3人

- ☞お話メモ
- ①すると、顔がさくらんぼになりました。
 - ②そうしたら、うわばみに食べられずのみこまれてしまいました。
 - ③でも、けちべえさんは、うわばみのおなかの中であばれてうわばみをついじしました。
 - ④その時、おとのさまが来て、うわばみをたいじしたおれいに十りよう、けちべえさんがもらえました。
 - ⑤おとのさまに、十りようももらえても、食べもの、のみものは何も買いません。
 - ⑥そのかわりに、りっぱな家をけちべえさんが、たてました。そして「りっぱな家だる。」と一日じゅういばっていました。
- 太字ゴシック: アドバイスをもとに付けたした・書きなおした言葉や文

4 おわりに

本実践では、詩や続き話を書く学習において、「考えを深め合う」姿をどのようにとらえるかということが明確ではなかったという課題が残る。

「書くこと」の学習で、ペア学習やグループ学習を学習過程の中にどのように位置づけていくと、子どもの考えが深まるのか。またそれはどんな姿なのか、今後も実践を通して明らかにしていきたい。